

海野福寿,権丙卓著 『恨:朝鮮人軍夫の沖縄戦』(書評)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000410

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



海野福寿・権丙卓著『恨——朝鮮人軍夫の沖縄戦』

鶴園裕

手紙の形で書評をするかってをお許しください。
海野先生へ

太平洋戦争が明治政権の初発から有している、その後も意氣昂揚で『文藝春秋』など一部マスコミから賞をもらった自民党代議士、また今年の靖国神社の春季例大祭では日本「國体」や「國柄」をうんぬんし「占領軍の亡靈」からの脱却を説いて國を守るための慰靈行為の正当性を主張した奥野長官発言（八八・四・二二）など枚挙にいとまがありません。そこに見られるのはまぎれもない悪しきとした中国侵略の総破綻の結果であったといふ家永三郎さんの名著『太平洋戦争』（一九六八年）に代表されるような、いわば歴史学の常識というようなものが意図的にも無意識的にも忘れられようとしている今日、このような日本の風潮に対し危機感を感じているのは、何も私だけではないでしょう。八三年の教科書問題を始めとし、侵略される側の責任

をうんぬんして文部大臣はやめさせられたものの、その後も意氣昂揚で『文藝春秋』など一部マスコミから賞をもらった自民党代議士、また今年の靖国神社の春季例大祭では日本「國体」や「國柄」をうんぬんし「占領軍の亡靈」からの脱却を説いて國を守るための慰靈行為の正当性を主張した奥野長官発言（八八・四・二二）など枚挙にいとまがありません。そこに見られるのはまぎれもない悪しきとした中国侵略の総破綻の結果であったといふ家永三郎さんの名著『太平洋戦争』（一九六八年）に代表されるような、いわば歴史学の常識といふようなものが意図的にも無意識的にも忘れるようとしている今日、このように日本の風潮に対して危機感を感じているのが、山口昌男・猪瀬直樹氏の対談『ミカドと世紀末』（一九八七年）における記念日で有名な文芸書の出版社（歴史関係

猪瀬氏の「あの太平洋戦争で結果的にアジアの彼らの植民地をみんな独立させちゃったんだから」（第六章、「心のなかのミカド」、一八二頁）以下の対話は、西欧に対して日本を限りなく特殊化させる論法で、結果的には日本帝国主義擁護になっています。「ゆきゆきて神軍」の映画批評の部分（第七章）などでは天皇制の無責任の構造などがしっかりととらえられているだけに（そもそも映画の主題がその問題でしたが）天皇制国家をストレンジャー・異人論でやっている文化人類学の怪しさが浮き上がっている印象でした。結して国際日本文化研究センターでのレビューストロークの講演など、日本文化礼讃論をやってもらって日本人自身はまたどのような自画像を描き出そうとしているのでしょうか。主観的で自己陶酔的な自画像を描くのは勝手ですが、近隣諸民族にとつては受け入れがたいものに違ひありません。

昨年の夏、本書をお送り頂いた時、最初は何かの間違いではないかと思ったものです。『恨』というカバーの大きな文字と『サラダ記念日』で有名な文芸書の出版社（歴史関係

の本もたくさん出版していることは後に知りましたが、「朝鮮人軍夫の沖縄戦」という副題を見、海野先生のお名前を発見してようやく以前お話をうかがった本だということに気づきました。しかも読み進む程に大きなショックに近い感動を受けました。これまで朝鮮史研究者や日本史研究者がどうしても越せなかつたアボリアや死角というようなものが、いつも樂々とのりこえられているように思えたからです。私は何人かの友人にも本書を推薦し、また『歴史評論』の編集部が私に書評を依頼した際もためらうことなくお引き受けしました。

しかし、編集部の依頼は、主として戦争体験の意味をどのように伝えるのかという意図からでしよう。その意味では、本書の原書である『ケラマ列島』(権丙早、一九八二年、朝鮮語、以下原書と略します)をお送り頂けたことは大変参考になりました。やはり、権丙早さんの書き書きが中心となった原書と主として海野先生の手が加わったと思われる本書には歴史意識や民族的な感性の違いと思われるようなものまでも感じることがあったから

です。そこには簡単には解決することのできないながつたいくつもの問題があつたのではない、かと推察しています。にもかかわらず、原書の単なる翻訳としてではなく手が加えられた共著として日本語で出版されたことの意味を私は高く評価しています。以下、歴史における追悼の意味や戦争体験の継承の問題などを原書と本書に即しながら考えて行きたいと思います。

一一

共著の書名の『恨』には恐らく歴史における追悼の意味が深く込められているのでしょうね。「恨」の意味論に関しては滝沢秀樹さんにすぐれた論文(『怨と恨—民衆史の方法に關連して』『歴史学研究』一九八七年一月)がありますからそれについても、やはり日本語の「恨」は文字どおり「恨み」、「怨恨」などのルサンチマンの意味あいが強く「恨」と書いて朝鮮語読みの「ハン」とふられても私は本書の書名としてはなにか違和感が残つたことも事実です。滝沢秀樹さんの言う

「韓国語の『恨』(ハン)」が持つてゐる單なるルサンチマンや「うらみ節」を越えたいわば歴史形成指向する精神としての意味、従つてその実践としての『恨』を解くこと(ハングブリ)の意味」を認め、海野先生のおつしやる「民族の屈辱的な歴史も『恨』であれば、個人の不幸な境遇も『恨』である。人びとはこれらの『恨』を解くためにしぶとく努力する。諦めることのない恨嘆のメンタリティ」が朝鮮民族の生命力を培つている(本書「まえがき」—海野執筆)といふ共通の認識、朝鮮語の「恨」のもつ積極的な歴史形成力を認めるがゆえに、いきなり「輸入概念」を表題に使うことへの危惧を感じたのです。その点ではむしろ『沖縄タイムス』の「軍夫の御靈に誓う」(八七年五月五日、七日)や雑誌『世界』の同年八月号に書かれた「慰靈の旅」の表題の方が日本人には分かりやすいでしょう。これららの文章を拝見すると、先生の歴史学は單なる机の上の歴史学ではなく、まさに行動する歴史学なのだということを実感させられます。

一月には沖縄に慰靈の旅に出、翌年の四

月には韓国に磨尚郡に慰霊碑を建立するという行為を通して歴史における追悼や鎮魂の意味を深く考えられたのだろうと存じます。これは失礼な言い方かも知れませんが、五〇歳を越して朝鮮語の手習いを始めた時にこのような共著を出されることを予想されていましたでしょうか。その意味では韓国に留学され、権丙卓さんに会われて原書に出会い、しやむに日本への紹介を志すという海野先生のバイタリティを支えたものは何だったのでしょうか。

三

先生は「まえがき」で次のように書かれていますね。「太平洋戦争史関係書のどれをひもとも、落丁のように朝鮮軍人・軍属の記述は欠落している。」また別の一節では「私たちとは、占領地域のアジア民衆のいまだ消えていない戦争の傷跡の追尋とともに、直接銃を取られたり、戦場へかり出された旧植民地民衆の戦争体験に耳を傾け、植民地・占領地民衆の苦悩と被害の実態を通じて太平洋戦

争史の全体をとらえ、アジア民衆と共に共有する歴史認識を深めたいと思う。歴史家としてのこのようなやむにやまれぬ思いが日本への原書の紹介の動機にはあつたのだろうと思ひます。またさらにその前提には「戦後世代の人びとにとつて、侵略も戦争も生まれるはるか昔のことである。半世紀も前に父祖が行つた暴虐の歴史に対し、同じ民族の一員として贖罪感をもつことよりも、いまのいま、日韓関係や日本国内において現実に存在している民族差別や做見に対する責任を負うべきだ、といふ意見もあるだろう。まさにそうである。私たちは、いまのいまの問題のためにやらねばならぬこと、やり切つていいことにもどかしさや負い目を感じている」という日本人としての責務感があり、「償おうとして償い切れぬあやまちではあるけれど、その歴史に立ち返らなければ民衆の深い信頼にもとづくこの國との友好関係を樹立することは不可能だろう。道は遠い」(いずれも「まえがき」から)といふ日本側の歴史認識の(欠落意識の欠如)現状へのいらだちとそれと同じぐらいの相互の「民衆の深い信頼」にもとづく友好への強い

願望があるのだろうと思ひます。確かに原書には不思議な魅力があります。海野先生が「まえがき」でお書きになつてある「被害者であるはずの沖縄県民が、『日本人としての沖縄県民』として植民地民衆に対しては加害者の立場にあつたこと」という深刻な問題も原書には私の読み取りの限りまったく表われず、それどころか千沢基氏の証言では住民が生きるために隠匿した食料を盗みだしたことに対する罪の意識が見られるし原書一七九頁、本書三〇一頁)、沈在彦氏の証言には生きる能力という点での日本人にたいする民族的な優越感すら窺えます(原書一九五頁、本書二一五頁)。死の美学に酔い、あるいは死の哲学を叩き込まれていた日本人と「恨」を抱えても生きぬくことを哲学としていた当時の朝鮮人とでは当然のことかも知れませんが、総じて深刻な体験にもかかわらず、原書全体に感じられるユーモアや余裕、日本人をみる際の「ゆるしとやさしさ」の視線はどこからくるのでしょうか。

「アジア民衆と共に共有する歴史認識」という願望はわかりますし、そこにこそ共著の意味が

あるのだと思いませんが、一方、両者にはまだ深い溝があることもまた事実だらうと思います。

四

書評として許された余白は残り少なくなってしまった。原書では前書きに続く冒頭部分に置かれた「慶山の春」の流言蜚語の部分(本書では第二章)は私には大変衝撃的でした。

宮田節子さんの労作『朝鮮民衆と「皇民化」政策』(一九八五年)の第一論文「朝鮮民衆の日中戦争観」は民衆の流言蜚語を抵抗の言語として捉えたものでしたが、「慶山の春」では官憲が民衆の抵抗意識を「引っ掛ける」ものとして流言蜚語を利用していた状況が描かれていたからです。主として官憲資料による宮田さんの論文が流言蜚語を「抵抗」としてとらえ、聞き書きによつた原書が流言蜚語を官憲の挑発としてとらえたことは、ある意味では事柄の二面性を示しただけのことながらも知れませんが、民衆史にかかる微妙な

問題を提起しているように思えました。また「一〇〇円の誘惑」の章(共著第三章)では狭義の強制連行が始まる以前の一九四〇年代の初めにおいても、梶村秀樹さんが「一九二〇～三〇年代朝鮮農民渡日の背景」(『在日朝鮮人史研究』六号、一九八〇年)で「農村の社会学的調査資料を利用して示したような「気力ある」青年像がすつきりとした形で示されていました。

その他にも原書には聞き書きを利用したものならではの臨場感のある記述が随所にみられます。本書でもほぼそれらの聞き書きの部

分は生かされているようでした。ただその点で残念なのは、原書にみられたアモルファスな北海道の土木現場における平岡という棒頭に対するアイヌ人差別意識や、炭鉱をやめる世界を捨てたような気がします。全体として、本書では、原書には見られない日本側資料の追加や、かなりの客觀資料の入れ換えて

(河出書房新社、一九八七年、一六〇〇円)

敬具

一九八八年五月三日を前に日本国憲法の理念が在日韓国・朝鮮籍の人々にも及ぼされることを願いつつ。

などが本書ではカットされている点です。

せっかくの聞き書きを利用した民衆意識の

握が行なわれ、歴史叙述としてはすつきりとしたものになっていますが、半面、海野先生の加筆部分と原書が本来持つてゐる「民衆世界」的な部分との不整合がみられなくはありませんでした。とはいへ、わずか一年の韓国留学で語学的な困難をのりこえ「アジア民衆と共有する歴史認識を深めたい」との一念からこれ程の成果を上げられた先生の行動力とその歴史学に後学の一人として深く学びたいと思っています。今後の一層のご活躍とご健康をお祈りいたします。

*

*

*